

1-7

胃癌における胃内洗浄液細胞診の検討—第二報—

杏林大学外科¹⁾、同病理²⁾

大木亜津子¹⁾、阿部展次¹⁾、竹内弘久¹⁾、海野みちる²⁾、大倉康男²⁾、杉山政則¹⁾

(背景と目的) 胃癌に対する内視鏡的全層切除術やLECSでは、癌腫や胃内容液が腹腔内に少なからず暴露される局面が不可避なため、癌細胞の腹腔内散布、ひいては腹膜播種の可能性が否定できないとされてきた。しかし、このような局面で癌細胞の腹腔内散布が起こるといふエビデンスもなく、そもそも胃内容液中に癌細胞が存在するか否かの基礎検討はなされていない。今回、胃癌症例における胃内洗浄液の細胞診を行ったので報告する(第二報)。

(対象と方法) 早期胃癌52例(うちESD施行中23例)、進行胃癌24例の計76例を対象とした。上部内視鏡検査時に胃内を軽く洗浄したのち、滅菌蒸留水250mlを腫瘍に勢いよく散布し洗浄液を回収した。ESDを施行した23例では、全周切開が終了した時点で同様の操作を行った。洗浄液を遠心分離、細胞成分を分離抽出し、沈渣を塗沫鏡検(パパニコロー染色、ギムザ染色)、細胞診による診断を行った。腺上皮細胞の核の形態が主病巣のHE染色結果と酷似している場合に、癌を疑う異型腺細胞陽性と判定した。

(結果) 洗浄液から検出された細胞成分は扁平上皮、腺上皮、間質細胞、細菌・真菌などであった。扁平上皮の検出率は99%、腺上皮の検出率は38%であり、腺上皮の洗浄液中への脱落は少なかった。癌を疑う異型腺細胞は、進行癌、早期癌、早期癌ESD中でそれぞれ2例(各々8%, 7%, 9%)に認めた。しかし、それらの細胞膜はいずれも変性が強く、細胞としては膨化/裸核化していた。また、未治療咽頭癌合併例で扁平上皮癌を疑う細胞が検出された。

(結論) 頻度は低率ではあるが、早期癌、進行癌にかかわらず、胃内洗浄液中に癌を強く疑う異形腺細胞が検出された。しかし、それらはviableな細胞とは言い難い形態を示しており、独立した増殖能や腹膜播種能はないと考えられた。

胃癌に対する内視鏡的全層切除術やLECSでは、本検討と同様に胃内は洗浄された状態であり、viableな癌細胞は胃内に存在していないと考えられ、懸念される腹膜播種は起こりがたい状況と考えられた。